

メリトクラシーの社会的構成にみる能力評価と習得方法の論理

——大衆雑誌の「コミュニケーション能力」言説の分析を通して——

筑波大学大学院 長創一朗

1 目的

この報告の目的は、大衆雑誌の「コミュニケーション能力」言説の分析を通して、現代において社会的に構成されるメリトクラシーの特徴を明らかにすることである。

後期近代はメリトクラシーが社会的・事後的に構成される「再帰的メリトクラシー社会」（中村 2009）である。意味内容も曖昧で批判されつつも多くの場面で評価基準となっている「コミュニケーション能力」を事例に、言説空間においてメリトクラシーが社会的・事後的に構成される際の能力評価と習得方法の論理を明らかにする。

2 方法

分析対象は、「大宅壮一文庫雑誌記事索引検索 Web 版」を用いて収集した、「コミュニケーション能力」「コミュニケーション力」を記事タイトルに含む全 267 件の記事である（記事は 1987 年から 2016 年まで、年に数件だった記事件数は 03 年に急増し、05 年以降、年に 20 件程度の割合）。これらの記事をもとに量的・質的に分析を行い論理構造の通時的変化を明らかにした。

3 結果

量的分析では、言説外部の社会において「コミュニケーション能力」の必要性が喚起されると並行して記事数が伸びていることが分かった。また、「コミュニケーション能力」言説は特定の職業集団（コミュニケーションの「専門家」やビジネスマン）によって生み出されていることが明らかとなった。

質的分析では、「コミュニケーション能力」言説の特徴を表す諸要素がどのような論理構造でなりたっているのかを明らかにした。その結果、過去の出来事の原因として能力の有無が判断されるという論理構造や、能力の習得・向上は未来における成功を目的としたときの手段として据えられるという論理構造があることが分かった。言説の諸要素とその論理構造の通時的変化に着目すると、「能力の必要性」が確認されつつ、「能力の習得・向上」の主題化と「方法論」の多様化へと記事の焦点が移動していることが分かった。

4 結論

1990 年代後半から新たに必要とされ育成すべきものとして登場した「コミュニケーション能力」は、その定義や必要性、方法論について特定の職業集団によって方向づけられており、そこでは「過去の結果から判断される結果の原因としての能力」から「将来の結果を生み出すための能力」へと因果の倒錯をおこしながら能力の習得・向上のための方法論へと焦点が移動している。このようにして、能力は誰でも身につけることができその方法論も存在するということを特定の職業集団が主張しながら、彼らの現在置かれている社会的地位が正当な評価の結果であると見せることを可能としつつ、メリトクラシーの正当化が行われているのが、現代的なメリトクラシーの特徴であると考えられる。

文献

中村高康, 2009, 「メリトクラシーの再帰性について——後期近代における「教育と選抜」に関する一考察」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』 35: 207-226.